底が突き抜けた」時代の歩き方 516

なぜ社会的弱者の若者は小泉政治を支持したのかー「下流社会」の出現

今回の９・１１選挙について香山リカは「『勝ち馬』『セレブ』選挙」（０５．９．１５付神戸朝刊）で、彼女が女性ということもあってか、やはり「刺客」候補に目を向けて次のような分析を行っている。従来の選挙であれば、《選挙区との関係性が薄い》上に、《経歴や生活ぶりが一般市民とはかけ離れた》「刺客」候補の女性たちが立候補することなど考えられなかったのに、《それが有権者の反発を呼ぶどころか、「セレブ」などと称されて人気を集め、実際の得票にもつながが》るという異変が生じた。もう一つの異変は、《劣勢を報じられた政党や候補者に同情票が集まる「負け犬効果」はほとんど見られず、自民党が優勢であると報じられれば報じられるほど、さらに票が集まる「勝ち馬効果」だけが目立った》ことである。彼女はこれらの異変を、《「勝ち馬」に乗ろうとした人が「セレブ」に一票、そういう選挙だったという言い方もできるかもしれない》とみる。このような事態が起こったことについて、彼女はこう考える。

《最も重要なのは「セレブ（選ばれた人、強い人）に一票を投じれば、自分も勝ち馬に乗れるかもしれない」と思ってしまった有権者の心の底に、「勝ち馬に乗り遅れたらもうおしまいだ」という切迫した不安が巣くっていたことなのではないだろうか。

だからこそ、従来であれば反感を買ったはずの「セレブ候補」は憧憬のまなざしで迎えられ、「自民優勢」と伝えられれば伝えられるほど、その勢いはひたすら加速することになった。

そこで、「セレブ？　冗談じゃない」「自民優勢か、じゃ自分はやめておこう」と、体制に批判的な態度を取ることは自分が少数者側にまわることを意味し、それが「私も負け組に転じるかもしれない」という内なる不安をさらにかき立てる。》

有権者のなかに「セレブ」に一票投じることによって、「勝ち馬」に乗ろうと考えた人が多かったという分析がなされている。「負け組」にはなりたくないという心理が働いたということだ。彼女の分析からすれば、戦後６０年にして初めて日本人の意識のなかに「勝ち馬」とか「負け組」といった言葉でしか言いあらわすことのできない社会階層への不安が生みだされていることを抜きにして、今回の選挙にみられたいくつかの異変を説明することはできないということである。つまり、選挙にまで「勝ち馬」「負け組」といった人々の不安な意識が色濃く投影されていたということだ。もちろん、不安の意識は不安の解消に向かおうとする。《不安から目をそらすためには、上質な「クールビズ」ファッションで決めた小泉首相や安倍晋三幹事長代理などメジャー感を漂わせ

た人たちの呼びかけに、「イエス」と答えるのがもっとも手っ取り早いのだ。民主党の岡田克也代表は白ワイシャツや地味なスーツを着用していることが多いが、今や「庶民的」に見えることは、「私と同じだ」と人々の不安を打ち消し、共感を呼び起こす手段になりえない。

むしろ自分とは別世界に住むはずの「セレブ」のほうが、それを見る人に「私までそうなってみたい」と幻想を持たせてくれ、安心感を生んでくれるのだ。人々の心の内にある不安は、「共感」ではなく「幻想」を持ってしか帳消しにできないほど、いつのまにか大きくなっていた、ということだ。》

香山リカがこう書いていることから感じられるのは、人々の「足掻いている不安」である。「漠然たる不安」といったものではなく、「切迫した不安」の息遣いといった感じだ。《人々の心の内にある不安は、「共感」ではなく「幻想」を持ってしか帳消しにできないほど、いつのまにか大きくなっていた》と言う。人々を駆り立てて止まない不安が、選挙の幻想に人々を突き動かしたということだろう。要するに、選挙に対してすら幻想を抱かざるをえないほどに、人々の不安は《いつのまにか大きくなっていた、ということだ》。人々の不安が幻想を膨らませていけばいくほど、その幻想のなかで一見ファンタスティックな「『勝ち馬』『セレブ』選挙」に呑み込まれていくことになるのは、必然であり、不可避であろう。いうまでもなく「幻想」は幻想にしか過ぎず、現実に塗れることはない。

《「勝ち馬」に乗り「セレブ」になったような夢を一瞬、見た人は、これからどうやって現実に着地するのだろう。自民党の歴史的圧勝が伝えられたとき、有権者の中からは「私は自民に入れたけれど、ここまで勝つとはなんだか怖い」と語る声も聞かれた。

いわゆる〝小泉劇場〟の中で一時の夢のために票を投じたはずだったのに、結果は〝劇場外〟の現実にまで及ぶものだった。しかも、自分自身はいっこうに「セレブ」にはなっておらず、相変わらず生活の不安はすぐそこにある。

はじめて事態の重大さに気づいた人の中には、新たな不安が生まれつつあるのではないか。そこで人々は内なる不安に向き合う覚悟を持つのか、それとも「もっと夢を見せてくれ」とリーダーに要求するのか。有権者の正念場はこれから始まるのかもしれない。》

もう一度繰り返すと、今回の選挙に関する異変は、人々が選挙というものに初めて幻想を抱くことによって生じたということだ。その選挙幻想はどこからやってきたのか。アクロバチックな〝郵政解散〟に人々の夢見る要素が含まれていたことは否めない。もちろん、それだけで多くの人々が選挙幻想に駆り立てられたわけではない。人々の生活的な安定が根底から大きく揺らいで、なにかにすがりたい不安が日々募る状態に人々が置かれていることに注目しなくてはならない。アクロバチックな〝郵政解散〟と人々の大きな不安とが結びついたとき、自民党の歴史的圧勝が生まれた。選挙幻想は一つの選挙結果を生み落としたが、当然のことながら人々の不安の解消に全く役立ちはしなかっ

た。それどころか、選挙幻想がもたらした自民党圧勝という事実が人々に「新たな不安」を付け加えることになった。選挙幻想に踊らされたツケを人々はどのように支払おうとするのか、ということだが、自分の外に膨らむ幻想に絶えず依拠する生活のあり方を、自分の手で埋葬しないかぎり、人々がどこへ進むのかはすでに目に見えているにちがいない。

香山リカが指摘している、国民全体を覆う「不安な気分」の正体について論理的に明らかにしているのが、宮台真司「民主党が示すべき政策は都市型弱者支援だ」（『論座』０５．１０）である。「旧保守＝農村型保守」「新保守＝都市型保守」「都市型リベラル」の三つのキーワードを軸に、今回の選挙を説明する。

《正義感、金融利権、経世会憎悪、ポピュリズム、米国好き、の５要素で彼の行動は説明できます。だから、郵政法案否決も衆院解散も１００％だと私は予想しました。（略）法案否決で衆院を解散すれば、自民党が負けようとも旧経世会が一掃されて万々歳だからです。

小泉首相が「そういう人だから」総裁に選ばれて自民党を延命させたのと裏腹に、「そういう人だから」旧自民党を当然潰そうとする。小泉氏を総裁にした時点でこうなるのが必然的なのです。この逆説の背後に、骨太な地殻変動があります。

小泉支持は、旧保守でなく新保守＝都市型保守です。１９９０年代を通じ、旧保守から新保守へと地殻変動がありました。「新しい歴史教科書をつくる会」「２ちゃん右翼」が象徴的です。過剰流動性と生活世界の空洞化で不安になって「断固」「決然」の言葉に煽られる「ヘタレ保守」です。》

小泉政権の基盤が「新保守＝都市型保守」層であるという分析によって、今回の選挙が亀井静香や綿貫民輔らが基盤としてきた「旧保守＝農村型保守」層との避けられない激突であり、最終的な死闘としての対立構図がくっきりと浮かび上がってくる。香山リカが指摘した国民の生活不安は雇用不安や年金不安、医療不安と国民生活の全般に渡っていたが、従来の自民党の政治的体質の改変によって国民の不安を乗り越えようとするスローガンとして、「改革」の二語が掲げられていたということだ。宮台真司によれば、《正義感と利権と個人的感情の重ね焼き》とポピュリズムの昂進によって、《国民の不安を煽り、鎮められるのは私だけだと勇気を示す、という伝統的戦略》を、小泉政権は巧妙に行使したのだ。新保守が旧保守の息の根を止めようとするなら、《バラマキ政治に終止符を打つ》ことが不可欠であり、その課題を背負った小泉首相が「正義と改革」の政治家として喧伝されるに至ったといえる。

《旧保守は集権的再配分を目指すので左派的です。再配分を望む地方の弱者が、旧社会党じゃなく自民党を頼るのは自然。だから自民党政治が永続し、小選挙区制でも二大政党が実現しなかったのです。

それが小泉氏で変わった。旧保守も旧左翼も団体的動員（土建屋的動員・組合的動員）を梃子（てこ）とする同じ穴のムジナです。新保守は、団体的動員とは無縁。天皇の尊崇と無関

係なことを含めて、都市無党派層に近い性質を持ちます。この地殻変動に、旧保守が鈍感だったのです。》

以上の指摘から、なぜ「刺客」の「セレブ」女性候補が反発されずに、人気を集めて当選するに至ったのかも説明できるかもしれない。選挙が自公の与党対野党の構図ではなく、自民党内の新保守対旧保守の構図が鮮明になったために、新保守の明るいイメージを盛り上げる「刺客」候補たちの、従来であれば有権者に受け入れられなかったであろうケバケバしさや軽薄さ等のマイナスイメージが対立構図のなかに解消されてしまったことが考えられる。「刺客」候補たちが保守同士の対立構図のなかにうまく収まったことによって、彼女たちのマイナスイメージがプラスイメージへと逆転されたとみることができる。この見方からすれば、《「セレブ」に一票》は保守の対立構図のなかの《「セレブ」に一票》だった筈であり、《「勝ち馬に乗り遅れたらもうおしまいだ」という切迫した不安》とは、新保守の勢いに取り残されたくない不安であったかもしれない。

宮台真司の分析は香山リカの分析に、新保守対旧保守の目鼻立ちがはっきりとした構図を差し込んだといえよう。そこで、香山リカのいう「不安」という言葉も、宮台真司によって「鬱屈」と言い換えられることで、より明瞭さを増してくる。

《社会学者の見田宗介氏が８月１６日付の「朝日新聞」で、日本は経済水準が高いのに「とても幸福だ」と答える人が極端に少ないと言っています。経済学者のアマルティア・セン的の言葉だとケーパビリティ（潜在能力）が低い。多様な仕事、多様な趣味、多様な家族、多様な性を自由に選べそうで、実は選べない。制度的に選べないのに加え、主体の能力が低いので選べない。だから鬱屈が広がるばかり。

鬱屈した国民は「決然」「断固」に象徴される小泉的振る舞いからカタルシスを得ます。現に都市部の若者は「気持ちいい」と口々に語る。それが新保守の感情です。この感情は２００１年参院選で明白でした。辞職した高祖憲治元参院議員の得票が典型で、自民党の団体的動員の時代は終わりました。

平成不況による会社共同体の空洞化に加えて、ハコもの的な集権的再配分による地域共同体の空洞化が、皮肉にも旧保守の地盤を崩しました。かくして新保守的な感情が高まる０１年、小泉首相が登場します。彼は１０年前から、バラマキ政治を続けたら未来はないと主張しています。完全に正しい。財政赤字を積むバラマキは、もの言えぬ子孫からの収奪で、倫理的に許されない。すぐにやめるべきです。》

日本人が「満足度の低い」国民であると海外の調査などでよく指摘される、その原因について制度的な問題であると同時に、個々人の満足度を高めることができない「主体の能力の低さ」の問題でもあることが、ここで看破されている。最大の「不安」は自分たちの能力の低さに見合った自信しか持ちえないことに対する不安であり、《だから鬱屈が広がるばかり》で、彼らの鬱屈が抵抗勢力に包囲されるなかでの自信に満ちた政治的強者振りを発揮する小泉首相に向かうことになるのは、あまりにも必然なのだ。自分

たちの惨めで情けない鬱屈が「決然」「断固」といった気勢からかけ離れた状態にあればあるほど、小泉的振る舞いにカタルシスを得、《現に都市部の若者は「気持ちいい」と口々に語る。》

この宮台真司の指摘どおりの記事がよく目に付く。たとえば、１１月２２日付朝日朝刊の根本清樹編集委員の「格差社会」と題するコラムには、０２年の規制緩和の影響によって新規事業者が多く参入し、増車も盛んで、商売敵が増え、運賃やサービス面での激しい競争にも晒されているタクシー業界が取り上げられている。景気が上向いてきたという声が聞かれる中、「わたしらとは別世界の話です」と話すタクシー運転手に関する、国土交通省と厚生労働省による今月の実態調査（調査対象の半数は５０代）では、《平均総労働時間は月２０４時間で、給与支給総額は１８万円から２８万５千円》で、「わたしには年金があるが、働き盛りが家族を食わしてくのはきつい」と言う、埼玉県内の６０代後半の運転手の声を載せている。コラムは「不平等社会」「格差社会」が進む日本で、《格差社会是正と「平等社会」の実現》が問われてもいいのに、その声は《しかし「郵政」にかき消され》、小泉改革が国民にしいる「痛み」はますます「格差社会」を押し進めるという趣旨を含んで記されるが、こちらの関心は次の記述にある。

《そういえば、タクシーの運転手さんには、話を聞くかぎり、郵政民営化を支持する人がとても多い。「公務員はボーナスが出るし、リストラもない」からである。ヒルズ族は比較の対象外にある。》

もう一件、坪内祐三の連載「人声天語－若者が小泉自民党を支持する『時代の閉塞』」（『文藝春秋』０５．１１）のなかで、９・１１選挙で東京では午後３時前後に数十分から１時間近くにわたって激しい雷雨が襲ったことに触れて、次のように述べている。

《この激しい雷雨が影響を与えたのはいわゆる浮動票である。それならば、その直撃を受けたのは民主党に違いない。だから、もし、あの雷雨がなかったとしたならば……。

という仮説をたてていたのだが、マスコミ関係者のある友人の話を聞いて、その仮説が全く成り立たないことを知った。

その友人が言うには、今回の総選挙で、浮動票のかなりの部分が自民党に流れたという。しかもその浮動票のニートな若者たちが小泉自民党を（改革者としての小泉純一郎を）強く支持したというのだ。》

ニートな若者たちの小泉支持という説に疑問を感じていた坪内祐三は、総選挙のあった翌週の９月１７日、友人に誘われて《今一部の若者たち（時代の閉塞を強く感じながらその閉塞に対してどのように気持ちをぶつけて良いのかわからない若者たち）に熱狂的に支持されているバンド》の「銀杏ＢＯＹＺ」のコンサートを見に行く。それは、《音楽を音楽として単に消費するのではなく、もっと切実なものの伝わってくる、良いコンサートだった。（中でも印象的だったのは、コンサートが終了しても、若者たちの多くがなかなか席を立とうとしなかったことだ ── 余韻を楽しみたいというのではなくとに

かくその場を離れたくないという感じだった)》が、コンサート後にこのバンドの追っかけをやっている友人から、《「銀杏ＢＯＹＺ」のファンの若者たち（彼らの多くはまだ選挙権を持っていない）が小泉自民党を支持していることを聞かされた》。

国民、とりわけ、ニートな若者たちに象徴される無党派層の鬱屈を吸引しえたことが、なにより小泉政治の勝利を決定づけたことが、以上のコラムからも見えてくる。《バラマキ政治を続けたら未来はないと主張》する小泉政治を押し上げていった点では、確かに彼らの選択は間違っていなかった。したがって彼らの投票行動について、信長気取りで「改革」のみを連呼する小泉政治の単純な手法に乗せられた愚かな無党派層、といった見方では済まされないものがある。しかしながら、《バラマキ政治を続けたら未来はない》としても、バラマキ政治をやめたからといって、彼らのようなニートな若者たちに未来が注がれるわけでもなかった。彼らにとって、そこが最大の問題であり、矛盾点であった。《でも、バラマキをやめるのと、弱者を放置するのとは別問題。現に社会的弱者だからこそ噴き上がる都市型ヘタレ保守は、小泉流「決然」にカタルシスを得ても、そのあと幸せになれません。そこに、都市型保守への「都市型リベラル」の対抗可能性があり、都市浮動票を取り合う二大政党制の可能性があるわけです》と、宮台真司は結局のところ、小泉政治の「小さな政府」構想は「弱者切り捨て」に進むのは不可避だから、民主党のポジションは《「都市型弱者」である非正規雇用者、シングルマザーや障害者の支援を徹底的に訴える。「フリーターがフリーターのままで幸せになれる社会」をアピール》するところに求めればよい、と主張する。よくいわれるように、小泉政治を支持することによって、無党派層が自分の首を自分で絞める方向へと足を踏み出した点では、愚かであったことは明らかである。宮台真司は９．２０付神戸でも、《自民党圧勝の社会的背景》について、こう述べる。

「都市無党派層を小泉自民党が根こそぎ持っていった。１９９０年代から社会的流動性が高まり、フリーターや契約社員などいわゆる社会的弱者が増えた。既に不安になっている弱者の不安をあおるのは容易で、こうした層が増大する初期には、質の悪いポピュリズムが現れる。自分を幸せにしてくれる力を検証しないまま、すっきりさせてくれる強者に寄り添う」

「だから『断固』『決断』と言う小泉純一郎首相が支持されるのだが、強者が実は自分たちを幸せにはしないという逆説に気付いていない。しかし、その逆説は昔から明らかだったことで、有権者に対して嘆いても始まらない」

弱者を幸せにしてくれる「都市型リベラル」として民主党が登場することが求められている、ということだ。「民主党支持というより、健全な二大政党制が実現しないと、この国は針路を誤るということだ。旧経世会型の再配分政治は『子孫からの収奪』で、小泉首相の『削る』『縮める』は支持されるべきだ。しかし、それだけでは長期的には社会が暗いイメージになってしまう。小泉型の優勝劣敗の思考と、社会に怨念が増大す

るところくなことはないから弱者を支援しようという思考とが、綱引きすることが重要だ」と、彼は説明する。
「弱者を幸せにしない強者に弱者が憧れる皮肉」の根底には、いうまでもなくニヒリズムが張り付いている。国民が自らを盲目にしてまで自らの鬱屈を晴らしたいと願う衝動は一体、どこからやってくるのかという疑問は依然大きく横たわったままである。「公務員はボーナスが出るし、リストラもない」から、郵政民営化を支持するタクシー運転手が多い、という先の朝日新聞編集委員のコラムがこの疑問に一つの答えを与えているだろう。文芸評論家のすが秀実は９．２８付産経で、《総選挙において、国民の関心は必ずしも「改革」にはないらしい》。その理由として、《郵政を最大の関心事とするのは２０％前後に過ぎず、５０％をこす人間の関心は年金など福祉にあ》ったことと、大半の国民、とりわけ若年無党派層は、《郵政民営化の具体的な内容を知》らなかったこと、が挙げられる。では、《どうして小泉自民党は圧勝したのか》と問う。
《比例代表の得票数では自民党は過半に届かず、意外と民主党など野党が多いといった分析には、あまり説得力がない。問題は、どの階層がキャスティングボートを握ったかであ》り、彼ら都市無党派若年層が《惹かれたのは「公務員削減」「税金の無駄使いをなくせ」というスローガンであったはずだ。郵政事業についてこれが妥当性を持つかは議論のあるところだが、このスローガンはかつての国鉄解体以来、支持されてきたものだ》と説明する。
《日本的雇用（終身雇用、年齢別賃金など）が一般に崩壊している現在、公務員がその特権をいまだに享受しているように見えるのは国民的な「嫉妬」の対象である。とりわけ、フリーターや派遣社員の若年層にとっては、そうである。彼らの嫉妬は高級官僚などではなく、郵便配達員など中下級公務員に向けられている。同じような仕事をしているのに（たとえば、宅配便）、というわけだ。これは、「平等」と「正義」の要求である。だから彼ら若年層は「福祉」（これも平等と正義だ）の充実を求めている。しかし、まずはウップンを晴らしたいというわけだろう。》
　小泉政治が掲げる郵政民営化への支持の中身は、公務員に対する「まずはうっぷん晴らし」以外のなにものでもない、ということが赤裸々に指摘されている。《国民的な「嫉妬」の対象》は、中下級公務員だけでなく、バラマキ政治の恩恵をこれまでずっと蒙ってきた地方の弱者も含まれていたということだ。《「決然」「断固」に象徴される小泉的振る舞い》に、都市部の若者が《「気持ちいい」と口々に語る》そのカタルシスは、「うっぷん晴らし」が淵源となっていたかもしれないとすれば、ニートな都市無党派若年層に象徴される国民が動いたのは、政治的理念や信条、あるいは政治的（党派性に対する）好悪などによってではなく、大抵の場合が社会的に優遇されているようにみえる身近な層への憎悪や嫉妬に基因しているという、これまでの歴史的事実の繰り返しにほかならなかったということになる。

このすが秀実の見解を数々の解説のなかで最も説得力があると注目した福田和也は、連載『闘う時評（『総中流社会」崩壊を直視せよ』）『週刊新潮』０５．１０．２０）で、《今回の選挙の核心が、非正規雇用労働者の、公務員にたいする嫉妬、反発にあるのだとすれば、公務員を重要な票田とする社民、共産が票を集められるわけがない、ということになるでしょう。》（ついでにいえば、公務員による組合的動員に片足を置く民主党も）と述べて、三浦展『下流社会』で取り上げられている《いわゆるフリーターやニートなどの主体となっている団塊ジュニア世代》の分析に向かう。

カルチャースタディーズ研究所とイー・ファルコン社の調査結果では、団塊ジュニア世代の下流に位置する層は、自民支持１８．８％、社民、共産支持０％。上流は自民支持８．３％、民主１６．７％、社民、共産０％。特定の支持政党なしが、上流に位置する層７５％に対し、下流６０．４％で、下流の方が政治意識が強い。《かつては弱者とされたような階層が、むしろ保守的な、マッチョな政治を強く支持し、また政治に関心を強くもつ状況》、つまり、「ぷちナショナリズム」の台頭によっても、《総中流社会は完全に崩壊した、ということは議論の前提として定着したようで》あり、三浦展『下流社会』が詳細に語っている、生活スタイルや価値観における階級化に言及していく。

《団塊ジュニア男性の場合、上流に位置すると認識している人が重要視しているのが、「ゆとり」「仲間・人間関係」であるのに、下流の場合「個性・自分らしさ」「自立・自己実現」というのが面白い。上層の人たちは、それなりに忙しいから、「ゆとり」を大事にするのでしょうか。

この傾向を、父親の世代と比較すると、団塊世代の場合は、人生にたいする姿勢を「自由に自分らしく生きること」とする回答は、上流に一番多い（上：６４．３、下：５６．８）のに、団塊ジュニアでは逆転して、下流に一番多いのです（上：５８．３、下：７５）。これはなかなか興味深いことですね。団塊世代の時代、自由に生きるためには、闘う必要があった。まだまだ社会には規制や障壁、抑圧があったし、経済的にも貧しかった。ところが、その息子の世代になると、自由に自分らしく生きるということは、面倒やしんどさから逃げることしか意味しない。つまりは、父親の世代にとっては闘争のためのスローガンだった価値観が、息子の世代には、逃避のための口実になった。「現代の若者は、階層意識が低い者の方で自分らしさ志向が強く（中略）、しばしば非活動的で、ひとりでいることを好む。／逆に言えば、自分らしさにこだわるが、性格が内向的な者は、仲間が少なく、就職活動もうまくいかず、フリーターになりがちであり、結果、所得が少なくなり、階層意識が低下する」。》

上層と下層の若者は単に生活水準における格差だけではなく、生活スタイルや価値観そのものの隔たりにおいて棲み分けが成立しており、したがって、なによりもその生活スタイルや価値観が上層と下層の階層の固定化を促していることが、そこに見て取れる。つまり、上層における生活スタイルや価値観が上層を上層たらしめていき、下層におけ

る生活スタイルや価値観を身に帯びているいるかぎり、下層が上層へ向かうことはけっしてありえない、ということである。というより、下層は上層へと向かう意思をもたないことにおいて、下層にじっと甘んじていることを自ら受け入れているのだ。「自由に自分らしく生きる」ために社会と闘い、自由を獲得していくという発想から遠く、《面倒やしんどさから逃げる》自由しか手にしないなら、下層の生活水準に甘んじるほかないだろう。

上層は上層に見合った生活スタイルや価値観をつくりあげ、下層では下層にふさわしい生活スタイルや価値観が生み出され、そこにもはや映画『太陽がいっぱい』のアラン・ドロンが演じたような、下層の飢えた若者を跋扈(ばっこ)させる余地を成熟社会が用意しなくなくなったとすれば、社会が上流社会と下流社会に完全に引き裂かれていくことになるのは必然にちがいない。価値観は当然趣味にも反映し、上層が旅行やスキー、サイクリング、ゴルフを好むなら、下層はオーディオ、音楽鑑賞、ゲーム、スポーツ観戦を好む。上層は仲間、活動的、コスト高であるのに対して、下層は独り、非活動的、コスト低と特徴づけられ、下層の三種の神器、パソコン、携帯電話（Ｐ ager)、プレイステーションの「３Ｐ」に、ペットボトルとポテトチップスの２Ｐを加えると、《そのライフ・スタイル全体が見えてくる》。女性の上層は読書、園芸であり、下層は楽器演奏やダンス・舞踏が多いことから、《「『下流』の男性はひきこもり、女性は歌って踊る」という光景が展開されるわけです。》

上流と下流の固定化に大きな役割を果たしているのは、教育に対する考え方の落差であり、上流の女性が《ゆとり教育を嫌い、英才教育や留学を必須なものと考え、子供に上品なふるまいをしてほしいと考える》のに対し、下流の女性は《手に職ををつけて自分らしく生きてほしい》と願っている。《この差が次の世代にそのまま持ちこされることは避けられないかもしれません。なにしろ上と下の女性では食事にたいする意識もまったく違い、下は朝食を食べない、食事時間が不規則、料理が面倒、コンビニ弁当をよく買う、などの傾向が高く、子供の食生活からして安定しない。「百ます計算」の陰山英男氏が、生徒に「早寝、早起き、朝ごはん」を習慣づけたというエピソードを紹介しつつ、三浦氏はこう語ります。「そういう生活の基本から教えないと、下流化した現代の親は、夜の１０時過ぎに子供を連れて居酒屋やカラオケに行ってしまう。これではゆとり教育でなくても学力が下がるのは当然であろう」。総中流社会が崩壊したことを直視し、如何にして階層の固定化を避けるか、ということを、広く議論することが必要です。》

福田和也のこの結語に対しては、宮台真司が指摘していたように、「バラマキはダメだから壊す」の小泉流の「小さな政府」構想が「都市型弱者」である非正規雇用者、シングルマザーや障害者に対する、福祉政策を縮小していく「弱者切り捨て」を押し進めつつある現在、この小泉政治を引っくり返す社会的な潮流が生み出されない限り、どう考えても絶望的に無理だといわざるをえない。しかも、福田和也自身が９・１１選挙に

おける自民党の地滑り的勝利について、都市のニートな若者たちの公務員や地方の弱者への厚遇に対する嫉妬や反発が底流にあったとみるすが秀実の説明に最も説得力を感じていたように、下流の若者が小泉政治の支持層として登場している捩れが大きく押しかかっているのだ。
「下流社会」が迫りつつある危機への警鐘を鳴らす『週刊ポスト』（１１．１１）のリポートのなかで、三浦展『下流社会』で導き出されている下層の住人の習性 ── 「単に所得が低いということではない。コミュニケーション能力、生活能力、働く意欲、学ぶ意欲、消費意欲、つまり総じて人生への意欲が低い。加えて、政治や経済に対する意識や理解が未熟なのも特徴のひとつです」という彼の言葉を前にして、《そんな彼らを生み出したのは、間違いなく小泉純一郎首相と竹中平蔵経済財政相当大臣の「小泉・竹中ライン」による経済政策》だとして、慶大教授の金子勝の解説を交えながら、その経済政策について述べる。
《「企業が潤うことで経済が活性化するという方針のもと、資産家所得には減税、雇用者所得には増税を課した。つまり、企業減税は放置したままサラリーマンには増税を課そうとしている。弱者を切り捨てていくのが、小泉・竹中改革の中身なんです」
　結局、大企業と資産家はますます潤い、サラリーマンの生活はますます苦しくなるだけ、と金子教授は続ける。
「上流と下流の二極分化は日本のグローバリゼーション（国際化政策）が本格化した２０世紀末からすでに始まっていました。経団連が９５年に『新時代の「日本的経営」』というリポートを発表しましたが、その中で今後の雇用形態を３つに分類しています。将来の幹部候補生である正規雇用である正社員、高度な特殊技能を持つ有期契約社員、マニュアル通りに働くだけの派遣社員やアルバイトです。その上で効率最優先の能力主義を徹底すべし、と提唱している。金融危機が本格化した９７年以降、非正規雇用者の数が劇的に増えるのも当然の結果です」
　事実、内閣府が発表した０１年の『国民生活白書』によれば、フリーターの数は４１７万人と過去最高。その中には、そろそろフリーターを卒業したいのにできない、３０代フリーターも多く含まれている。》
　日本が「弱者切り捨て」のアメリカ型の社会モデルに近づきつつあるのは、誰の目にももはや明白であり、そのアメリカ型の社会モデルに基づいて「下流社会」がいよいよ到来しつつあるということだ。ほぼ5年前に、「努力すればなんとかなる」社会から「努力してもしかたない」社会へと日本が踏み入っていることを、５５年から１０年おきに実施されてきた「社会階層と社会移動全国調査」のデータに基づいて、佐藤俊樹東大助教授が『不平等社会　さようなら総中流』で明らかにし、注目されたが、「父親がホワイトカラー上層でない人は、ホワイトカラー上層になりにくくなっている」、俗な言い方をすれば、「いい学校を出ていい仕事につく人は、親もいい学校を出ていい仕事をし

ている」ような階級社会化が５年後には固定化が進んで、明確に「下流社会」をかたちづくるに至ったということになるだろう。
『週刊ポスト』のリポートは経済アナリスト森永卓郎の、「小泉改革が階層の二極分化を生むことは最初から分かり切ったこと。他国の歴史が証明していますから。例えば、８０年代、イギリスでサッチャー政権が経済効率優先の政策を取った結果、中産階級が崩壊し、カーテンレールすら買えない下流社会の住人が増えた。同様にアメリカでも、８０年代に中流から下流に落ちる人が続出した。これがわかっていながら改革をやるのだから、確信犯ですよ。／８５年のプラザ合意以降、急激な円高による一時的な不況を経てバブルが始まり、自分さえよければいいという社会風潮が広まりましたが、階層格差が拡大した今、その風潮はさらに広まっています」という言葉から、政治が「下流社会」を生みだしているのに、今回の総選挙にみられるように、その「下流社会」の住民が怒りの拳を振り上げるどころか、小泉改革を支持するという皮肉な事態に触れている。「下流層の人は自分を小泉改革の犠牲者だと気付いていない。現状を打破するためには小泉改革でも何でもいいと考えている。そして、改革という美名に踊らされているだけだということに気付いていない。もはや弱者は踊りながら殺されていくだけなんです」という、金子勝の分析を取り上げて、事態が下流階層の増大によって、「自国内移民」の大量発生を促し、「自国内移民」が就職難民であることにおいて「結婚難民」でもあり、「フリーターはフリーターしかできなくなってしま」い、《下流の子供は下流になる可能性が高い》ために、《下流の無限連鎖が始まる》という三浦展の指摘と共に、「たとえ下流でも、価値観を変え、主観的に自分は幸福だと思えればいい」という意見を紹介して、リポートはこう締め括る。
《将来を楽観視するのも、過剰に不安がるのも間違いだ。小泉政権の改革の名のもとに推し進められる政策の是非を見抜き、それと同時に自らの状況を観察することが肝要。もし自分の下流化傾向に気付いていないとしたら、今からでも遅くはない。「下流社会」に転落する前に対策を急ぐべきだろう。》
　小泉政権の政策の是非も見抜けないことも、また、自らの状況の観察を放置することも、更に「下流社会」転落前の対策を立てられないことも、すべて「下流社会」住人の特質であり、要するに自分を幸福にする能力の低さ及び、あらゆる意欲の喪失や能力の低さにおいて、「下流社会」をかたちづくっているなら、一体どうすることができるというのだろう。野村総研の１２月５日発表の「仕事に対するモチベーション（やる気）に関する調査」で、上場企業の若手社員の４分の３が「現在の仕事に無気力を感じ」、仕事に社会的な意義を見出せないために成長の実感もないことを浮かび上がらせていたが、「下流社会」出現の事態が突きつけているのは、日本（世界中）の社会全体を覆っている生き辛さ、生きる意欲の低下であり、世界が「下流社会」に閉じこめられていく危機であるだろう。　　２００５年１２月１０日記